

# 高等学校地理における地域調査学習の実証的研究

## — 異文化理解の深まりを視点として —

永 田 成 文

**Empirical research on region studies lessons in high school's geography education  
: From the viewpoint of creating better cross-cultural understanding**

**Shigefumi NAGATA**

### 要 旨

高等学校地理は世界の人々との共存・共生を考える学習が求められている。本研究では、学習者が主体的に追究し、異文化を認識し、異文化を思考するような学習として、地理独特の手法である地域調査の手法を取り入れた異文化理解を深める学習を提案している。新しい学習論として、学習内容では文化構造を意識して、“人間活動の成果”ばかりでなく“文化を継承した人間”を認識すること、学習方法では地域調査の現地調査の過程で異文化交流の仮想体験を活用することを提示した。実験授業の実施による分析から、異文化交流の仮想体験の活用は異文化理解を深めることを実証し、異文化理解を深める高等学校地理における地域調査学習の開発視点を提示した。

### I. 高等学校地理における異文化理解学習の現状と課題

現代世界は、異なる文化を継承している人々の交流が進み、国家レベルから個人レベルまで様々な文化摩擦<sup>1)</sup>が生じている。人々の文化摩擦を少なくし、世界の人々が文化的に共存・共生するためには、異文化理解を深める学習を教育の中に積極的に取り入れていく必要がある。

高等学校地理は世界の諸地域の生活・文化を学習対象としてきた。2009年版高等学校新学習指導要領において、地理Aは中項目「世界の生活・文化の多様性」、地理Bは中項目「生活文化、民族・宗教」が設定されている。このような生活・文化に関する学習は1989年版学習指導要領から継続して重視されている。特に地理Aでは、テーマ学習として、学習者に異文化を理解し尊重することの重要性について考察させることに重点をおいている。

学習指導要領解説地理歴史編(1999)では、世界の諸地域の生活・文化についての学習内容と学習方法を次のように説明している(P.178)。

「生活・文化」とは、衣食住を中心とした生活様式だけでなく、生産様式にかかわる内容も含み、広く人間の諸活動から生み出されるものを意味している。…「追究し」とは、学習の過程を重視する観点から、単に世界の諸地域の地域性を知識として詰め込むような学習ではなく、生徒自らが生活・文化に関する地理的事象を資料等から見だし、課題を設定して調査し、考察するといった一連の活動を行うことを意味している。

下線部筆者

高等学校地理における生活・文化に関する学習は、「生活・文化」について、衣食住等の生活様式ばかりでなく、産業などの生産様式も含むとしている。衣食住を中心とした生活様式は“人間活動の成果”

であり、高等学校地理では人々の行動そのものや考え方など“文化を継承した人間”への意識が弱い。また、「生活・文化」への学習者の主体的な探究活動が促されているが、学習者にどのようにして主体的に探究させ、どのようにして異文化を理解し尊重させるかの手だてが示されていない。

文化人類学は人間の多様な生活様式を整理し、体系的に理解することを課題とする。文化人類学の文化の定義について、米山は(1991)は、「後天的に獲得され、集団成員によって分有され、世代を通して継承されていくような行動様式と価値観である」(p.7)としている。本研究では、この定義を採用し、高等学校地理における生活・文化に関する学習を異文化理解学習として考察していく。佐野(1995)は、異文化への対応のためには、「交流する地域の人々の価値観は概ね自分とは異なることを意識し、コミュニケーション行動や実質行動に関わるルールを持つことが大切である」(p.62)と述べている。西脇(1993)は、地理における異文化理解学習について、「単なる事実を知識として伝達するのではなく、子どもが自分なりの生き方に通じる世界観や世界像を形成するのに役立つ概念を育む必要がある」(p.65)と述べている。このように異文化理解学習では、異文化への対応を視野に入れ、学習者が人々の行動に関わる価値観を意識して考察していく必要がある。高等学校地理における異文化理解学習の課題は、学習者が人々の行動様式や価値観を主体的に追究し、学習者の所有する文化と対照化し、どのような行動をとるべきかを判断するような学習に改善することである。

矢島(1998)は、「地域を単位とし、地域的特色を異質性と類似性、変容から見て、地図を使うというような地理的な見方や考え方を育成する学習は、地域調査の中に全て含まれる」(p.13)と述べている。学習者は、「なぜその地域でそのような異文化が存在するのか」という問いについて、一連の地域調査の過程を通して、対象地域の異文化を主体的に追究し、追究した結果として異文化を認識することができる。高等学校地理における異文化理解学習では、地理独自のアプローチとして、地域調査の手法を取り入れることが考えられる。

本研究の目的は、高等学校地理における異文化理解学習として、対象とする地域について学習者の異文化理解を深めるような地域調査学習を実証的に検討することである。異文化理解が深まるとは、学習者の異文化に対する認識(異文化認識)が深まるとともに認識した異文化に対する思考(異文化思考)が深まることである。

本研究の方法は、次の通りである。

第1に、高等学校地理における異文化理解をテーマとした地域調査学習において、異文化理解を深めるとはどのようになることかについて認識面と思考面から提示する。

第2に、高等学校地理における異文化理解をテーマとした地域調査学習において、様々なタイプの実験授業を実施し、異文化理解の深まりという視点から分析する。

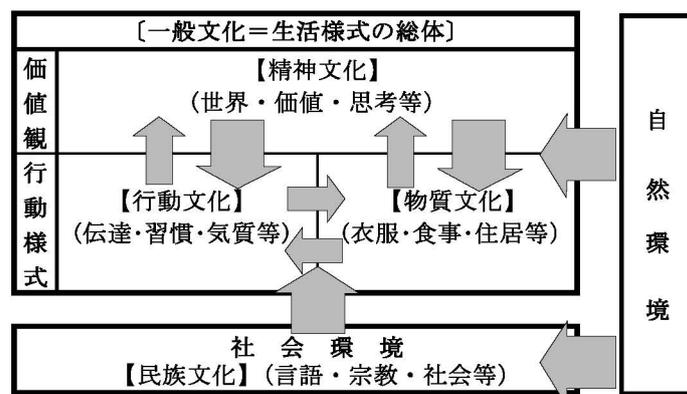
第3に、分析した結果から、高等学校地理において、異文化理解を深める地域調査学習となる開発視点を提示する。

## II. 異文化理解を深める地域調査学習

### 1) 異文化理解を深める

高等学校地理では、文化を衣食住や言語・宗教等の個々の文化事象が集合した総体としてとらえ、個々の文化事象を追究する傾向があった。永田(2000)は、「文化は個々の文化事象が同じレベルで集まった集合体ではなく、文化構造を持っている」(p.73)としている。石井(1998)は、「生活様式の総体である一般文化は、精神文化・行動文化・物質文化の3大要素で成り立ち、それぞれ相互に影響・機能し合っている」(p.46)としている。文化は、部分文化として精神文化・行動文化・物質文化という文化の構成

要素が存在し、この構成要素は地域の自然環境や社会環境から影響を受けるとともにお互いに影響し合っている。文化の構成要素の中に文化事象が含まれ、文化の構成要素間は構造化されている。第1図は、文化人類学の文化の定義と石井の主張を参考に、精神文化は価値観に、行動文化と物質文化を行動様式にあてはめ、行動様式や価値観の土台となる社会環境として民族文化<sup>2)</sup>を示したものである。



注) 矢印は影響の方向を示す。

第1図 文化構造と自然環境との関係

シタラム (Sitaram, K.S.) (1985) は、「価値は人が決定を行う際に基礎となるものである。価値は人が自分自身の行為や他人の行為を判断する基準となっている」(p.201) と述べている。地理的な見方として、学習者に行動様式である物質文化や行動文化が地域に存在することを確認させ、地理的な考え方としてそれらの文化が地域に存在する背景を学習者に追究させることにより、価値観である精神文化にも着目させることができる。異文化認識を深めるとは、物質文化ばかりでなく、行動文化にも着目し、その背景としての精神文化をも認識することである。

異文化を理解し尊重するためには、まず世界の人々の価値観が自己の所有する価値観とは異なることを認識し、その上で人々の行動様式や価値観について、どのように対応していくのかを思考する必要がある。小原 (1996) は、異文化理解の方法として、3つの「問い」と「活動」を示している。すなわち、①「どのように、どのような」と問い、事象の過程や特色を記述する活動、②「なぜ、どうして」と問い、目的と手段、条件と結果、原因と結果の関係の推論によって説明する活動、③「どうしたらよいか、なにをなすべきか」と問い、目的を実現するための最も合理的な手段・方法を判断する活動である。①～③の問いと活動の流れは、対象とする地域の異文化について、どのような異文化が存在するのかを記述し、なぜそのような異文化が存在するのかを説明し、異文化に対してどうしたらよいかを判断する一連の研究プロセスとなっている。①と②の過程を踏むことにより地理の見方や考え方を育成し、異文化を認識することができる。③の過程は異文化を尊重することに関わる判断が必要となる。この問いと活動を学習の中に組み込むことにより、学習者の思考を深めることができる。異文化思考を深めるとは、認識した異文化を記述し、記述した異文化を説明し、異文化への対応を判断することである。

## 2) 異文化理解を深める地域調査学習

学習者が認識した異文化の背景を主体的に追究し、異文化に対応していくためには、現地の人々と交流し、文化摩擦を体験することが一番理想的である。なぜなら、自己の所有する文化との違いから異文化に対する疑問が生じ、異文化への対応を迫られるからである。本研究では、直接体験のかわりに文献調査として、実際に現地に滞在し、現地の人々との交流を行ったと仮定して、異文化交流体験を仮想するという“異文化交流の仮想体験”を活用する。

異文化理解を深める地域調査学習は、対象地域の自然・社会状況などの基礎的な情報を収集する事前調査過程、異文化交流の仮想体験を活用して異文化を認識し、認識した異文化に対して思考する現地調査過程、異文化について再考察し発表する整理報告過程の3つの過程からなる。現地調査過程では、まず、対象地域での異文化交流体験が見込める項目を学習者に設定させる。次に、各項目において学習者が仮想した異文化交流体験を報告書としてまとめさせる。学習者は報告書づくりに必要な人々の行動様式や価値観に関わる文化の調査が必要となる。

### 3) 異文化理解の深まりの分析指標

異文化理解の深まりは報告書の記述から分析する。文化の構成要素である民族文化、物質文化、行動文化、精神文化のそれぞれに属する文化事象である言語・宗教・社会、衣服・食事・住居、伝達・習慣・気質、世界・価値・思考について、学習者が認識したことの分析指標を示したものが第1表である。報告書の記述の中に、各文化事象の記述がある場合にその回数をそれぞれカウントする。民族文化と物質文化は表象として現れている“人間活動の成果”、行動文化と精神文化は表象として現れていない“文化を継承した人間”としての文化に該当する。“人間活動の成果”から“文化を継承した人間”の記述が増えるにつれて、学習者の異文化認識が深まることになる。

第1表 異文化認識の深まりをとらえる指標

↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓	人間活動の 成果	民族 文化	言語…人々が使用している言語の記述（使用されている言語の特徴を含む）
			宗教…人々が信仰している宗教の記述（宗教に伴う儀礼・寺院等を含む）
			社会…人々が社会に伝えてきた事柄の記述（祭り・行事・教育・マナー・規則・芸術等）
		物質 文化	衣服…人々が着ている衣服の記述（衣服の材料を含む）
			食事…人々が食べている食事の記述（食事に伴うマナー等を含む）
			住居…人々が使用している建物の記述（住居以外の地域の建築物を含む）
	文化を継承 した人間	行動 文化	伝達…人々が使用しているコミュニケーション行動の記述（言語体験を含む）
			習慣…人々が日常生活で繰り返し行っている行動の記述（行動を伴う生活習慣等）
			気質…人々が地域で培われた性格や気質による行動の記述（主義や方針を含む）
		精神 文化	世界…人々が神・人間・自然を知覚・認識する際の根拠となる記述（宗教の教義を含む）
価値…人々が善悪を判断する際の根拠となる記述（伝承された社会制度・慣習等）			
思考…人々が問題を思考する際の根拠となる記述（置かれた状況に対する考え方等）			

注) 第1図の文化の構成要素と文化事象に対応している。

筆者作成

異文化理解の方法である記述、説明、判断のそれぞれの活動に属するそれぞれの思考項目である比較・変化、疑問・分析、意見・対応について、学習者が思考したことの分析指標を示したものが第2表である。報告書の記述の中に、それぞれの文化事象の認識に関連した思考項目の記述があるときにその回数をそれぞれカウントする。記述、説明、判断は一連の思考のプロセスであり、この順に記述が増えるにしたがって、学習者の異文化思考が深まることになる。

第2表 異文化理解の思考の深まりをとらえる指標

↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓	記述	比較…異文化に接触した際に、異文化に対して自国や他地域の文化と比較した記述
		変化…異文化に接触した際に、異文化に対して見方・考え方が変化した記述
	説明	疑問…異文化に接触した際に、異文化に対して探究型の疑問を述べた記述
		分析…異文化に接触した際に、異文化に対して自己分析を述べた記述
	判断	意見…異文化に接触した際に、異文化に対する自分の意見を述べた記述
		対応…異文化に接触した際に、異文化に対する自分の対応を述べた記述

注) 思考のプロセスに対応している。体験記述を参考に思考項目を設定した。

筆者作成

### Ⅲ. 高等学校地理における地域調査学習の実験授業

#### 1) 高等学校地理における入力型と出力型による地域調査学習の実験授業

2001年度、第2学年の地理A選択の3クラス（各38名）に、シンガポール修学旅行の事前学習として、シンガポールの文化をテーマとした地域調査学習である単元「修学旅行事前調査学習」<sup>9)</sup>を実施した（第3表参照）。1時間のオリエンテーションと1時間の事前調査過程を3クラスの共通学習とし、2時間の現地調査過程は異なる文献調査の手法を取り入れた。これらの実践を比較分析することにより、地域調査学習における有効な文献調査の手法を検討することができる。

第3表 高等学校地理における地域調査学習の実験授業

単元「修学旅行事前調査学習」の構成（各クラス4時間：①～③各クラス38名）【2001年度実践】			
過程	①クラス：異文化体験記 [出力型]	②クラス：文化レポート [入力型]	③クラス：文化教科書 [入力型]
オリエンテーション	1. 調査テーマ・2. 地域選定 1h		
	○ 修学旅行の行程認識 0.5h ○ 修学旅行訪問先調査 0.5h		
事前調査	3. 調査地域の資料収集 1h		
	○ シンガポールの調査 1h		
現地調査（文献調査）	4. 資料収集・観察・測定・聞き取り 2h		
	○異文化体験例認識 体験記項目設定 0.5h	○異文化レポート例認識 レポート項目設定 0.5h	○教科書記述例認識 教科書項目設定 0.5h
	○異文化体験記作成 1.5h	○異文化レポート作成 1.5h	○文化教科書作成 1.5h

筆者作成

オリエンテーションでは、修学旅行の予定表を全員に配布し、修学旅行の行程を確認させた。事前調査過程では、修学旅行用のシンガポール小冊子を基礎資料として全員に配布し、言語、宗教、衣服、食事、住居の“人間活動の成果”に関わる文化について調査させた。現地調査過程では、①クラスは修学旅行の行程を既に行ったつもりになって体験できそうな文化を調べて異文化の体験記としてまとめさせた。②クラスは修学旅行の行程で見聞できそうな文化を調べて文化のレポートとしてまとめさせた。③クラスは興味のあるシンガポールの文化を調べて教科書のように客観的にまとめさせた。3クラスとも現地調査として、個々の学習者にB4用紙1枚に3項目程度の項目を設定させ、その項目についてまとめさせた。シンガポールの旅行ガイド等の本を数冊準備し、資料として常に閲覧できるようにしていた。

小西（1994）は、知識や思考力を身につけさせるのを入力型授業観、持てる力で何事かにトライないしチャレンジしたり、身につけたものを使わせるのを出力型授業観としている（pp.20-25）。①クラスの異文化体験記づくりは、既に持っていたり調査した知識を基にして、修学旅行の行程から異文化交流体験を仮想する出力型学習である。②クラスの異文化レポートづくりは修学旅行の行程で見聞できる文化事象や体験を調査する入力型学習である。③クラスの文化教科書づくりは、対象地域の興味のある文化事象を選択して調査する入力型学習である。

#### 2) 高等学校地理における異文化交流の仮想体験を活用した地域調査学習の実験授業

高等学校地理における異文化交流の仮想体験を活用した地域調査学習として、単元「修学旅行異文化体験記」（9時間+実体験）、単元「ワーキングホリデー異文化体験記」（10時間）、単元「ホームステイ留学異文化体験記」（10時間）を実施した（第4表参照）。

各単元とも、オリエンテーション、事前調査過程、現地調査過程、整理報告過程の地域調査の過程を

踏み、現地調査の過程で異文化交流の仮想体験を活用した文献調査として、個々の学習者に B4 用紙 1 枚に 3 項目の項目を設定させ、その項目についてまとめさせた。これらの単元の成果を比較することにより、地域調査学習の現地調査過程において異文化交流の仮想体験を活用する有効な手法を検討することができる。

第 4 表 高等学校地理における異文化交流の仮想体験を活用した地域調査学習の実験授業

過程	学習項目	学習活動
単元「修学旅行異文化体験記」の構成（9 時間＋修学旅行実体験：38 名）【2000 年度実践】		
オリエンテーション	1. 調査テーマの決定	1 h ○修学旅行行程認識 1 h
	2. 調査地域の選定	1 h ○修学旅行訪問先調査 1 h
事前調査	3. 調査地域の資料収集	1 h ○シンガポールの調査 1 h
④ 現地調査 (文献調査) (野外調査)	4. 資料収集・観察・測定・聞き取り	○異文化交流体験例認識・項目設定 1 h
		○異文化交流体験の考察と集材 1 h
		○修学旅行異文化体験記作成 2 h
		シンガポール修学旅行（2000. 10. 21-25）実体験
整理報告	5. 調査結果の分析検討	○修学旅行異文化体験記修正 1 h
	6. 報告書作成（教師が冊子にする）	○疑問解明レポート作成 1 h
単元「ワーキングホリデー異文化体験記」の構成（10 時間：38 名）【2001 年度実践】		
オリエンテーション	1. 調査テーマの決定	0.5 h ○ワーキングホリデー制度認識 0.5 h
	2. 調査地域の選定	0.5 h ○制度選択国の地域調査学習認識 0.5 h
⑤ 事前調査	3. 調査地域の資料収集	○選択国の調査 1 h
		○教科書記述例認識・項目設定 1 h
		○選択国の文化事象調査 1 h
		○選択国の文化教科書作成 1 h
現地調査 (文献調査)	4. 資料収集・観察・測定・聞き取り	○異文化交流体験例認識・項目設定 1 h
		○異文化交流体験の考察と集材 1 h
		○ワーキングホリデー異文化体験記作成 2 h
整理報告	5. 調査結果の分析検討	○疑問解明レポート作成 1 h
	6. 報告書作成（教師が冊子にする）	○異文化体験記集を読むのみ
単元「ホームステイ留学異文化体験記」の構成（10 時間：29 名）【2002 年度実践】		
オリエンテーション	1. 調査テーマの決定	0.5 h ○ホームステイ短期留学制度認識 0.5 h
	2. 調査地域の選定	0.5 h ○留学選択国の地域調査学習認識 0.5 h
⑥ 事前調査	3. 調査地域の資料収集	○選択国の調査 1 h
		○教科書記述例認識・項目設定 1 h
		○選択国の文化事象調査 1 h
		○選択国の文化教科書作成 1 h
現地調査 (文献調査)	4. 資料収集・観察・測定・聞き取り	○異文化交流体験例認識・項目設定 1 h
		○異文化交流体験の考察と集材 1 h
		○ホームステイ留学異文化体験記作成 2 h
整理報告	5. 調査結果の分析検討	○疑問解明レポート作成 1 h
	6. 報告書作成（教師が冊子にする）	○異文化体験記集を読むのみ

筆者作成

(a) 修学旅行の異文化交流の仮想体験と実体験を活用した地域調査学習

2000年度、第2学年の地理A選択者(38名)に、現地調査過程として、修学旅行の異文化交流の仮想体験を活用した文献調査を行い、さらに修学旅行の実体験を経験する単元「修学旅行異文化体験記」の実験授業を実施した。

オリエンテーション(2h)では、学習者の修学旅行に対する意識を高めるため、修学旅行の予定表を全員に配布し、修学旅行の行程を確認させ、自由行動の計画を立てさせた。

事前調査過程(1h)では、修学旅行用のシンガポール小冊子を基礎資料として全員に配布し、言語、宗教、衣服、食事、住居の“人間活動の成果”に関わる文化を調査させた。

現地調査過程(5h+実体験)では、修学旅行の異文化体験記づくりをさせた。学習者各自にシンガポールの資料を収集するように伝え、シンガポールの旅行ガイド等の本を数冊準備し、参考資料として常に閲覧できるようにしておいた。最初の1hで、異文化交流の体験記例を提示し、学習者に異文化交流体験記づくりのイメージをもたせた。修学旅行の行程の中で、最も異文化交流体験が期待できる目抜き通りでの実践英会話体験の場面は必ず記述するように指定し、他の2項目は学習者に設定させた。次の1hで、各項目における異文化交流体験を構想させ、どのような資料が必要になるのかを考察させた。その後の2hで、必要な文献調査をさせた上で異文化体験記としてB4用紙1枚程度にまとめさせた。修学旅行の実体験を経験後の1hで、実体験前の異文化体験記の項目と粗筋を変えない範囲で記述内容を修正させた。

整理報告過程(1h)では、個人で疑問解明レポートをB5用紙1枚のワークシートにまとめさせた。クラス全体の異文化体験記の記述内容を提示し、疑問に思った異文化についての記述をピックアップさせ、異文化をみつめ、その背景をとらえ、自己の考えを定めるという記述→説明→判断の一連の思考のプロセスを踏ませた。

(b) ワーキングホリデー制度の異文化交流の仮想体験を活用した地域調査学習

2001年度、第3学年の地理B選択者(38名)に、現地調査過程として、ワーキングホリデー制度<sup>9)</sup>の異文化交流の仮想体験を活用した文献調査を行う単元「ワーキングホリデー異文化体験記」の実験授業を実施した。

オリエンテーション(1h)では、ワーキングホリデー制度の概要と目的を学習者に認識させた。また、学習者にワーキングホリデー制度採用国の中から異文化交流体験をしてみたい国を選択させ、グループをつくった。

事前調査過程(4h)では、対象国の文化をグループで共有化させるために学習者に文化教科書づくりをさせた。学習者各自に対象国の文化教科書づくりの資料を収集するように伝え、ワーキングホリデー採用国の旅行ガイド等の本を数冊準備し、参考資料として常に閲覧できるようにしておいた。最初の1hで、ワーキングホリデー制度の基礎資料を全員に配布し、言語、宗教、衣服、食事、住居の“人間活動の成果”に関わる文化を調査させた。次の1hで、地理教科書の文化に関わる記述例を提示し、教科書の客観的記述を意識させ、学習者に文化教科書の3つの項目を設定させた。その後の2hで、3つの項目について調査させ、文化教科書を完成させた。

現地調査過程(4h)では、対象国の異文化交流の仮想体験に基づく異文化体験記づくりをさせた。まず、学習者各自に対象国の異文化体験記づくりの資料を収集するように伝えた。最初の1hで、個人が作成した文化教科書をグループで読ませ、対象国の文化事象の知識の共有化をさせた。その後、異文化交流による体験記例を提示し、異文化交流体験記づくりのイメージをもたせた。さらに、ワーキングホリデー制度の自由に滞在計画を立て、働きながら地域を旅するという特質から、宿泊先、職場、体験先の3つの場面に対応する3つの項目を設定させた。次の1hで、各項目における異文化交

流体験を仮想させ、どのような資料が必要になるのかを考察させた。その後の2hで、必要な文献調査を適宜させ、異文化体験記としてB4用紙1枚程度にまとめさせた。

整理報告過程(1h)では、個人で疑問解明レポートをB5用紙1枚のワークシートにまとめさせた。グループの異文化体験記の記述内容を提示し、疑問に思った異文化についての記述をピックアップさせ、記述→説明→判断の一連の思考のプロセスを踏ませた。

#### (c) ホームスティ短期留学の異文化交流の仮想体験を活用した地域調査学習

2002年度、第3学年の地理研究選択者(29名)に、現地調査過程として、ホームスティ短期留学の異文化交流の仮想体験を活用した文献調査を行う単元「ホームスティ留学異文化体験記」の実験授業を実施した。

オリエンテーション(1h)では、ホームスティ短期留学<sup>5)</sup>の概要と目的を生徒に認識させた。英語圏の国から異文化交流体験したい国を選択させ、グループをつくった。

事前調査過程(4h)は、ホームスティ短期留学の基礎資料を全員に配布したこと以外は、単元「ワーキングホリデー異文化体験記」と同様に文化教科書づくりをさせた。

現地調査過程(4h)は、対象国のホームスティ留学に関わる本を数冊準備したこと、ホームスティ短期留学のホームスティをして学校に通い、地域で交流を深めるという特質から、体験記の項目をホームスティ、学校、地域体験の3つの場面を提示し、項目を設定させたこと以外は、単元「ワーキングホリデー異文化体験記」と同様に異文化体験記づくりをさせた。

整理報告過程(1h)では、単元「ワーキングホリデー異文化体験記」と同様に疑問解明レポートを作成させた。

## IV. 実験授業における異文化理解の深まりの比較分析

各報告書について学習者の各文化事象に対する認識の記述と認識に関連する思考の記述をクラス全体でカウントした総計がそれぞれ第5表と第6表である。

### 1) 入力型と出力型の地域調査学習の比較

修学旅行事前調査学習の各単元の異文化認識をみると(第5表①②③参照)、全体の数は文化教科書づくりをした単元③(154)が一番多く、異文化体験記づくりをした単元①(105)や異文化レポートづくりをした単元②(102)の約1.5倍である。文化教科書づくりは、異文化体験記づくりや異文化レポートづくりのように修学旅行の行程から項目を設定するという限定がなく、文化事象を収集しやすかったと考えられる。単元③の文化の構成要素の表出割合は、「民族文化」が特に高く(65.6%)、「物質文化」を合わせると9割を超える(91.6%)。単元②も同様の傾向を示している。2つの入力型の単元は学習者の意識が“人間活動の成果”に向いている。これは、学習者が対象地域の外から文化をとらえる情報で構成するため、“文化を継承した人間”への意識が弱くなっていると考えられる。出力型の単元①は、「行動文化」の割合が高い(24.8%)。特に、「伝達」の項目に特化している。これは、不十分ながら異文化交流体験を仮想したことで、学習者が対象地域の内から文化をとらえる情報で構成することが可能となり、現地の人々とのコミュニケーションを意識しやすかったと考えられる。

異文化思考をみると(第6表①②③参照)、全体の数は単元③(24)が一番多く、単元①(15)や単元②(16)の約1.5倍である。入力型の単元②や単元③は「民族文化」に関わる思考が多く、出力型の単元①は「物質文化」に関わる思考が多い。記述、説明、判断の思考のプロセスの表出数は、単元①から③の順に、記述(9→7→12)、説明(3→5→7)、判断(3→4→5)であり、入力型の単元②や単元③の方が出力型の単元①よりも説明や判断の数が多くなっている。単元①では出力するための十分な情報が学習者に

高等学校地理における地域調査学習の実証的研究

第5表 地域調査学習の異文化認識の結果

		人間活動の成果						文化を継承した人間						合計
		民族文化			物質文化			行動文化			精神文化			
		言語	宗教	社会	衣服	食事	住居	伝達	習慣	気質	世界	価値	思考	
①	修学旅行事前調査学習① 異文化体験記(出力型)	11	10	17	10	23	8	25	1	0	0	0	0	105
		38(36.2%)			41(39.0%)			26(24.8%)			0(0.0%)			105(100%)
		79(75.2%)						26(24.8%)						105(100%)
②	修学旅行事前調査学習② 異文化レポート(入力型)	9	34	20	8	21	7	0	0	1	1	0	1	102
		63(61.8%)			36(35.3%)			1(1.0%)			2(1.9%)			102(100%)
		99(97.1%)						3(2.9%)						102(100%)
③	修学旅行事前調査学習③ 文化教科書(入力型)	19	48	34	1	33	6	3	4	1	3	1	1	154
		101(65.6%)			40(26.0%)			8(5.2%)			5(3.2%)			154(100%)
		141(91.6%)						13(8.4%)						154(100%)
④	修学旅行 異文化体験記(+実体験)	14	10	27	10	21	3	23	0	4	1	0	1	114
		51[134.2](44.7%)			34[89.4](29.8%)			27[71.1](23.7%)			2[5.3](1.8%)			114[300.0](100%)
		85[223.7](74.6%)						29[76.3](25.4%)						114[300.0](100%)
⑤	ワーキングホリデー 異文化体験記	21	3	24	5	34	16	37	12	11	3	4	2	172
		48[126.3](27.9%)			55[144.7](32.0%)			60[157.9](34.9%)			9[23.7](5.2%)			172[452.6](100%)
		103[271.1](59.9%)						69[181.6](40.1%)						172[452.6](100%)
⑥	ホームステイ留学 異文化体験記	20	2	32	0	25	10	24	23	15	6	2	2	161
		54[186.2](33.6%)			35[120.7](21.7%)			62[213.8](38.5%)			10[34.5](6.2%)			161[555.2](100%)
		89[306.9](53.3%)						72[248.3](44.7%)						161[555.2](100%)

注) 対象生徒はホームステイ留学のみ29名、他は38名。( )の%表示は文化の構成要素の表出割合。  
④～⑥の[ ]はポイント数を人数で割って100を掛けた値。  
筆者作成

第6表 地域調査学習の異文化思考の結果

			人間活動の成果						文化を継承した人間						合計
			民族文化			物質文化			行動文化			精神文化			
			言語	宗教	社会	衣服	食事	住居	伝達	習慣	気質	世界	価値	思考	
①	修学旅行事前調査学習① 異文化体験記(出力型)	記述	比較	1		3			1	4					9
		記述	変化												0
		説明	疑問			1									1
		説明	分析					1							2
		判断	意見							1					1
		判断	対応												2
		合計		1	0	6	0	2	4	2	0	0	0	0	0
トラブル			7			6			2			0		0	
②	修学旅行事前調査学習② 異文化レポート(入力型)	記述	比較		1	4						1		1	7
		記述	変化												0
		説明	疑問												0
		説明	分析	1	2	1			1						5
		判断	意見		1	2									3
		判断	対応			1									1
		合計		1	4	8	0	0	1	0	0	1	0	0	1
トラブル			13			1			1			1		0	
③	修学旅行事前調査学習③ 文化教科書(入力型)	記述	比較		2	7			3					12	
		記述	変化											0	
		説明	疑問			1								1	
		説明	分析	1		2			2			1		6	
		判断	意見			3								3	
		判断	対応											2	
		合計		1	4	13	0	5	0	0	0	1	0	0	0
トラブル			18			5			1					0	
④	修学旅行 異文化体験記(+実体験)	記述	比較	1	2	7	1	3	1			3		1	19
		記述	変化			4	1	2							7
		説明	疑問			2									2
		説明	分析												0
		判断	意見			2	1	1					1		5
		判断	対応			3	1	1							4
		合計		1	2	18	3	7	1	0	0	3	1	0	1
トラブル			21[55.3]			11[28.9]			3[7.9]			2[5.3]		1[2.6]	
⑤	ワーキングホリデー 異文化体験記	記述	比較	2		10		6	3		1	3	2	1	29
		記述	変化			1		3	1						5
		説明	疑問			1	1								2
		説明	分析	1		4						1	1	1	9
		判断	意見			2		1				1			4
		判断	対応			2		3		2					7
		合計		3	0	20	1	13	4	2	1	5	3	2	2
トラブル			23[60.5]			18[47.4]			8[21.1]			7[18.4]		11[28.9]	
⑥	ホームステイ留学 異文化体験記	記述	比較			15		6	3	1	8	7	4	1	47
		記述	変化	1		1			2						4
		説明	疑問	1		1			1		1				5
		説明	分析			1		1		1	3			1	7
		判断	意見			3				3	3	1	2		12
		判断	対応			1		2		4	2		2		11
		合計		2	0	22	0	11	4	9	17	8	9	2	2
トラブル			24[82.8]			15[51.7]			34[117.2]			13[44.8]		14[48.3]	

注) 対象生徒はホームステイ留学のみ29名、他は38名。( )の%表示は記述・説明・判断の表出割合。  
④～⑥の[ ]はポイント数を人数で割って100を掛けた値。  
筆者作成

準備できていないため、異文化交流体験の仮想が不十分となり、思考が深まっていないと考えられる。

単に文化の情報量の獲得を考えた場合、単元③の入力型の文化教科書づくりのように、記述する項目を限定しないほうがよいことがわかる。入力型の活動は事前調査過程に適している。単元①の出力型の異文化体験記づくりでは「行動文化」をより強く意識できており、出力型の活動は情報を獲得後の現地調査過程に適している。

## 2) 実体験活用の有無による地域調査学習の比較

第5表①④にて、現地調査過程(2h)で修学旅行での異文化交流の仮想体験を活用した単元「修学旅行事前調査学習①」と、現地調査過程(4h)で修学旅行での異文化交流の仮想体験を活用し、その後実体験を行った単元「修学旅行異文化体験記」を比較する。

異文化認識をみると、全体の数は「修学旅行異文化体験記」(114)の方が「修学旅行事前調査学習①」(105)より若干多い。永田(2001)は、実体験の活用により、民族、規則、交通など地域の「社会」の項目の意識は高まるがその他の項目は実体験前とほとんど変わらないことを明らかにしている。「修学旅行異文化体験記」は現地調査過程の設定時間が多く、学習者が実体験をしたため社会への洞察力が高まり認識の数が多くなっている。文化の構成要素の表出割合は、両単元とも「民族文化」と「物質文化」の割合が高く、「行動文化」では「伝達」の項目に特化している。学習者の意識が“人間活動の成果”に向き、“文化を継承した人間”に向いていない。これは、両単元では学習者が修学旅行という見学者の視点に立っているため、現地の人々との異文化交流体験を仮想しにくかったためだと考えられる。

異文化思考をみると、全体の数は「修学旅行異文化体験記」(37)が「修学旅行事前調査学習①」(15)の約2.5倍である。両単元とも“人間活動の成果”に関わる思考が多く、“文化を継承した人間”に関わる思考はほとんどなされていない。記述、説明、判断の思考のプロセスの表出数は、「修学旅行事前調査学習①」、「修学旅行異文化体験記」の順に、記述(9→26)、説明(3→2)、判断(3→9)であり、「修学旅行異文化体験記」の方が多く、特に記述の段階において違いがみられる。これは、異文化体験記づくりの時間が十分に確保されたことと、実体験で実際に異文化に触れることにより、思考項目の比較や変化を意識をしやすかったためであると考えられる。

異文化に対する学習者の認識や思考は「修学旅行異文化体験記」の方が若干深まるが、主に「民族文化」の「社会」の項目で差が顕著である。「社会」の項目は事前調査過程における調査活動で理解を深めることができる。このことは、実体験を伴わなくても、現地調査過程において異文化交流の仮想体験を活用することで異文化理解を深めることができる程度可能であることを示している。

## 3) 異文化交流の仮想体験を活用した地域調査学習の比較

第5表④⑤⑥にて、事前調査過程、現地調査過程、整理報告過程を踏み、現地調査過程で異文化交流の仮想体験を活用した単元「修学旅行異文化体験記」、「ワーキングホリデー異文化体験記」、「ホームステイ短期留学体験記」を比較する。

異文化認識をみると、全体の値<sup>9)</sup>は、「修学旅行異文化体験記」[300.0]、「ワーキングホリデー異文化体験記」[452.6]、「ホームステイ短期留学体験記」[555.2]となっており、実体験を伴う修学旅行よりもワーキングホリデーやホームステイ短期留学で異文化交流体験を仮想した単元が約1.5倍から1.9倍である。文化の構成要素の表出割合は、「修学旅行異文化体験記」は「民族文化」が高い(44.7%)が、「ワーキングホリデー異文化体験記」と「ホームステイ短期留学体験記」はそれぞれ「行動文化」が高く(34.9%、38.5%)なっている。「修学旅行異文化体験記」は学習者が見学者の視点から異文化交流体験を仮想しているのに対し、「ワーキングホリデー異文化体験記」や「ホームステイ短期留学体験記」

は学習者が生活者の視点から異文化交流体験を仮想しているためであると考えられる。

第6表④⑤⑥にて、異文化思考をみると、全体の値は「修学旅行異文化体験記」[97.4]、「ワーキングホリデー異文化体験記」[147.4]、「ホームステイ留学異文化体験記」[296.6]となっており、実体験を伴う修学旅行よりもワーキングホリデーやホームステイ短期留学で異文化交流体験を仮想した単元の値が約1.5倍から3倍である。文化の構成要素の値は、「修学旅行異文化体験記」は「民族文化」[55.3]、「物質文化」[28.9]、「行動文化」[7.9]、「精神文化」[5.3]であり、“文化を継承した人間”に関わる思考がほとんどなされていない。「ワーキングホリデー異文化体験記」は、「民族文化」[60.5]、「物質文化」[47.4]、「行動文化」[21.1]、「精神文化」[18.4]、「ホームステイ留学異文化体験記」は、「民族文化」[82.8]、「物質文化」[51.7]、「行動文化」[117.2]、「精神文化」[44.8]となっており、「修学旅行異文化体験記」よりも“文化を継承した人間”に関わる思考がなされている。「ホームステイ留学異文化体験記」では、特に「行動文化」に属する「習慣」の項目の思考がなされ、学習者が人々の生活習慣に触れることを仮想していることがわかる。記述、説明、判断の思考のプロセスの表出値は、「修学旅行異文化体験記」、「ワーキングホリデー異文化体験記」、「ホームステイ留学異文化体験記」の順に、記述(68.4→89.5→175.9)、説明(5.3→28.9→41.4)、判断(23.7→28.9→79.3)であり、「ホームステイ留学異文化体験記」が最も思考が深まっている。また、トラブル<sup>7)</sup>の値も「ホームステイ留学異文化体験記」が最も多くなっている。これは、「ワーキングホリデー異文化体験記」や「ホームステイ留学異文化体験記」では、学習者が生活者の視点に立っているためである。特に「ホームステイ留学異文化体験記」では、ホストファミリーなど現地の人々との交流し、人々の行動に対する対応が求められる場面を仮想しやすかったと考えられる。

#### 4) 異文化交流の仮想体験の場面設定による比較

現地調査過程における異文化交流の仮想体験の活用は、生活者の視点となる滞在型の方が異文化交流体験を仮想しやすく、学習者の異文化認識や異文化思考が深まった。「ワーキングホリデー異文化体験記」と「ホームステイ留学異文化体験記」は、生活者の視点となる滞在型の異文化交流の仮想体験を活用し、地域調査学習の過程や配当時間は同じである。また、両単元は異文化体験記の大枠の場面設定として宿泊先、外出先、体験先を設定し、それぞれの項目を学習者が設定することも同じである。しかし、両単元では、異文化認識や異文化思考の深まりに差がみられた。特に、異文化思考の深まりにおいて顕著である。異文化認識の深まりの違いは、学習者が異文化交流の仮想体験として現地の人々との交流をイメージできたかに大きく関係すると考えられる。「ホームステイ留学体験記」は、より学習者が人々との交流により異文化に対する疑問や異文化への対応を迫られる場面を仮想することができていたため異文化思考もより深まったと考えられる。また、ホームステイ先の地域、通う学校の地域、異文化体験したい地域が学習者に結びついているため、それぞれの場面で異文化交流の仮想体験をイメージしやすくさせていたと考えられる。このように、学習者が生活者の視点に立つことができる滞在型の異文化交流の仮想体験の活用において、より現地の人々と交流できる場面設定を考える必要がある。

「ワーキングホリデー異文化体験記」は宿泊先、外出先の職場、体験先のそれぞれの細かい部面設定について学習者に選択させるのに対して、「ホームステイ留学異文化体験記」は宿泊先はホームステイで、外出先は短期留学の受け入れ先の学校で、体験先はホームステイ先の地域体験と細かい場面をあらかじめ設定している。両単元の体験記による場面ごとの異文化認識と異文化思考の結果を表したものが、それぞれ第7表、第8表である。

宿泊先場面における異文化理解の深まりを比較する。異文化認識の全体の値は、「ワーキングホリデー異文化体験記」[215.8]、「ホームステイ留学異文化体験記」[258.6]であり、「ホームステイ留学異文化

第7表 仮想異文化交流体験の体験場面による異文化認識の結果

		人間活動の成果						文化を継承した人間						合計
		民族文化			物質文化			行動文化			精神文化			
		言語	宗教	社会	衣服	食事	住居	伝達	習慣	気質	世界	価値	思考	
宿泊先	ワーキングホリデー 異文化体験記 【選択】	6[15.8]	0[0]	12[31.6]	0[0]	26[68.4]	8[21.1]	15[39.5]	11[28.9]	3[7.9]	0[0]	1[2.6]	0[0]	82[215.8]
		18[47.4] (22.0%)			34 [89.5] (41.7%)			29[76.3] (35.4%)			1 [2.6] (1.2%)			82[215.8] (100%)
		52[136.8] (63.4%)						30[78.9] (36.6%)						82[215.8] (100%)
宿泊先	ホームステイ留学 異文化体験記 【地域のホームステイ】	6[20.7]	1[3.4]	7[24.1]	0[0]	18[62.1]	7[24.1]	10[34.5]	16[55.2]	4[13.8]	3[10.3]	1[3.4]	2[6.9]	75[258.6]
		14[48.3] (18.7%)			25 [86.2] (33.3%)			30[103.4] (40.0%)			6 [20.7] (8.0%)			75[258.6] (100%)
		39[134.5] (52.0%)						36[124.1] (48.0%)						75[258.6] (100%)
外出先	ワーキングホリデー 異文化体験記 【職場】	13[34.2]	1[2.6]	3[7.9]	1[2.6]	4[10.5]	0[0]	18[47.4]	0[0]	6[15.8]	1[2.6]	1[2.6]	1[2.6]	49[128.9]
		17[44.7] (34.7%)			5[13.2] (10.2%)			24[63.2] (49.0%)			3 [7.9] (6.1%)			49[128.9] (100%)
		22[57.9] (44.9%)						27[71.1] (55.1%)						49[128.9] (100%)
外出先	ホームステイ留学 異文化体験記 【地域の学校】	12[41.8]	0[0]	18[62.1]	0[0]	2[6.9]	0[0]	10[34.5]	1[3.4]	7[24.1]	0[0]	0[0]	0[0]	50[172.4]
		30[103.4] (60.0%)			2 [6.9] (4.0%)			18[62.1] (36.0%)			0[0] (0.0%)			50[172.4] (100%)
		32[110.3] (64.0%)						18[62.1] (36.0%)						50[172.4] (100%)
体験先	ワーキングホリデー 異文化体験記 【選択】	2[5.3]	2[5.3]	9[23.7]	4[10.5]	4[10.5]	8[21.1]	4[10.5]	1[2.6]	2[5.3]	2[5.3]	2[5.3]	1[2.6]	41[107.9]
		13[34.2] (31.7%)			16[42.1] (39.0%)			7[18.4] (17.1%)			5[13.2] (12.2%)			41[107.9] (100%)
		29[76.3] (70.7%)						12[31.6] (29.3%)						41[107.9] (100%)
体験先	ホームステイ留学 異文化体験記 【地域の異文化体験】	2[6.9]	1[3.4]	7[24.1]	0[0]	5[17.2]	3[10.3]	4[13.8]	6[20.7]	4[13.8]	3[10.3]	1[3.4]	0[0]	36[124.1]
		10[34.5] (27.8%)			8[27.6] (22.2%)			14[48.3] (38.9%)			4[13.8] (11.1%)			36[124.1] (100%)
		18[62.1] (50.0%)						18[62.1] (50.0%)						36[124.1] (100%)

注) [ ] はポイント数を人数で割って100を掛けた値。( )の%表示は文化の構成要素の表出割合。  
筆者作成

第8表 仮想異文化交流体験の体験場面による異文化思考の結果

		民族文化			物質文化			行動文化			精神文化			合計		
		言語	宗教	社会	衣服	食事	住居	伝達	習慣	気質	世界	価値	思考			
		宿泊先	ワーキングホリデー 異文化体験記 【選択】	記述	比較	1[2.6]		3[7.9]		4[10.5]	3[7.9]		1[2.6]	1[2.6]		
変化					1[2.6]		3[7.9]	1[2.6]							5[13.2]	(60.0%)
疑問	説明			1[2.6]		2[5.3]									1 [2.6]	4[10.5]
宿泊先	ホームステイ留学 異文化体験記 【地域のホームステイ】	判断	意見			2[5.3]		1[2.6]			1[2.6]			4[10.5]	8[21.1]	
		対応			1[2.6]		3[7.9]							4[10.5]	(26.7%)	
		合計	2[5.3]	0[0]	10[26.3]	0[0]	11[28.9]	4[10.5]	0[0]	1[2.6]	2[5.3]	0[0]	0[0]	0[0]	30[78.9]	(100%)
宿泊先	ホームステイ留学 異文化体験記 【地域のホームステイ】	トラブル				1[2.6]				1[2.6]		1[2.6]			3[7.9]	
		記述	比較			2[6.9]		4[13.8]	3[10.3]		5[17.2]	1[3.4]	3[10.3]	1[3.4]	21[72.4]	23[79.8]
		変化				2[6.9]									2 [6.9]	(62.2%)
外出先	ワーキングホリデー 異文化体験記 【職場】	説明	疑問							1[3.4]				2 [6.9]	4[13.8]	
		分析				1[3.4]				1[3.4]				2 [6.9]	(10.8%)	
		判断	意見							1[3.4]	1[3.4]				3[10.3]	10[34.5]
外出先	ホームステイ留学 異文化体験記 【地域の学校】	対応			1[3.4]		2[6.9]		1[3.4]	2[6.9]	1[3.4]			7[24.1]	(27.0%)	
		合計	0[0]	0[0]	3[10.3]	0[0]	9[31.0]	4[13.8]	2[6.9]	10[34.5]	1[3.4]	5[17.2]	1[3.4]	2[6.9]	37[127.6]	(100%)
		トラブル									1[3.4]			1[3.4]	12[41.4]	
外出先	ワーキングホリデー 異文化体験記 【職場】	記述	比較	1[2.6]		2[5.3]		2[5.3]			1[2.6]			6[15.8]	6[15.8]	
		変化												0 [0]	(54.5%)	
		疑問	説明											0 [0]	3[7.9]	
体験先	ワーキングホリデー 異文化体験記 【選択】	判断	意見											0 [0]	2[5.3]	
		対応												2 [5.3]	(18.2%)	
		合計	1[2.6]	0[0]	2[5.3]	0[0]	2[5.3]	0[0]	2[5.3]	0[0]	2[5.3]	0[0]	1[2.6]	1[2.6]	11[28.9]	(100%)
体験先	ホームステイ留学 異文化体験記 【地域の異文化体験】	トラブル								5[13.2]					7[18.4]	
		記述	比較							1[3.4]	1[3.4]	3[10.3]			17[58.6]	19[65.5]
		変化	1[3.4]		1[3.4]										2 [6.9]	(63.3%)
体験先	ホームステイ留学 異文化体験記 【地域の異文化体験】	説明	疑問	1[3.4]		1[3.4]								2 [6.9]	3[10.3]	
		分析							1[3.4]					1 [3.4]	(10.0%)	
		判断	意見			2[6.9]				2[6.9]	1[3.4]				5[17.2]	8[27.6]
体験先	ワーキングホリデー 異文化体験記 【選択】	対応								3[10.3]				3[10.3]	(26.7%)	
		合計	2[6.9]	0[0]	15[51.7]	0[0]	1[3.4]	0[0]	7[24.1]	1[3.4]	4[13.8]	0[0]	0[0]	0[0]	30[103.4]	(100%)
		トラブル									1[3.4]				1 [3.4]	
体験先	ホームステイ留学 異文化体験記 【地域の異文化体験】	記述	比較			5[13.2]				1[2.6]	2[5.3]	1[2.6]	1[2.6]	10[26.3]	10[26.3]	
		変化												0 [0]	(66.7%)	
		疑問	説明				1[2.6]							1 [2.6]	4[10.5]	
体験先	ホームステイ留学 異文化体験記 【地域の異文化体験】	判断	意見											0 [0]	1 [2.6]	
		対応												1 [2.6]	(6.7%)	
		合計	0[0]	0[0]	8[21.0]	1[2.6]	0[0]	0[0]	0[0]	0[0]	1[2.6]	3[7.9]	1[2.6]	1[2.6]	15[39.5]	(100%)
体験先	ホームステイ留学 異文化体験記 【地域の異文化体験】	トラブル									1[2.6]				1 [2.6]	
		記述	比較			2[6.9]		1[3.4]			2[6.9]	3[10.3]	1[3.4]		9[31.0]	9[31.0]
		変化													0 [0]	(47.4%)
体験先	ホームステイ留学 異文化体験記 【地域の異文化体験】	説明	疑問								1[3.4]			1 [3.4]	5[17.2]	
		分析				1[3.4]				2[6.9]		1[3.4]		4[13.8]	(26.3%)	
		判断	意見			1[3.4]				2[6.9]		1[3.4]		4[13.8]	5[17.2]	
体験先	ホームステイ留学 異文化体験記 【地域の異文化体験】	対応									1[3.4]			1 [3.4]	(26.3%)	
		合計	0[0]	0[0]	4[13.8]	0[0]	1[3.4]	0[0]	0[0]	6[20.7]	3[10.3]	4[13.8]	1[3.4]	0[0]	19[65.5]	(100%)
		トラブル									1[3.4]				1 [3.4]	

注) [ ] はポイント数を人数で割って100を掛けた値。( )の%表示は思考のプロセスの表出割合。  
筆者作成

体験記」が約 1.2 倍となっている。両単元は、“人間活動の成果”に関わる値はほとんど変わらないが、“文化を継承した人間”に関わる値で差が開いている。特に「行動文化」に属する「習慣」の項目と、「精神文化」に属する「世界」の項目で差が開いている。文化の構成要素の表出割合は、「ワーキングホリデー異文化体験記」は「物質文化」(41.7%)、「ホームステイ留学体験記」は「行動文化」(40.0%)が最も高い。異文化思考の深まりを比較すると、全体の値は「ワーキングホリデー異文化体験記」[78.9]、「ホームステイ留学体験記」[127.6]であり、「ホームステイ留学異文化体験記」が約 1.6 倍である。両単元は“文化を継承した人間”に関わる思考項目で差が顕著にみられる。記述、説明、判断の思考のプロセスの表出値は、「ワーキングホリデー異文化体験記」、「ホームステイ留学異文化体験記」の順に、記述 (47.4→79.3)、説明 (10.5→13.8)、判断 (21.1→34.5) であり、「ホームステイ留学異文化体験記」の方が思考が深まっている。また、トラブルの値も「ホームステイ留学異文化体験記」の方が約 5.2 倍となっており、より文化摩擦が生じている。「ホームステイ留学異文化体験記」は宿泊先をホームステイに限定したため、ホストファミリーという現地の人々を特定でき、学習者が異文化交流体験を仮想し、仮想した異文化に対する疑問が生じ、判断が迫られたため値が高くなっている。

外出先場面における異文化理解の深まりを比較する。異文化認識の全体の値は、「ワーキングホリデー異文化体験記」[128.9]、「ホームステイ留学異文化体験記」[172.4]であり、「ホームステイ留学異文化体験記」が約 1.3 倍となっている。「ワーキングホリデー異文化体験記」は、“文化を継承した人間”に関わる値が高く、特に「行動文化」に属する「伝達」の項目に特化している。「ホームステイ留学異文化体験記」は、“人間活動の成果”に関わる値が高く、特に「民族文化」に属する「社会」の項目に特化している。文化の構成要素の表出割合は、「ワーキングホリデー異文化体験記」は「行動文化」(49.0%)、「ホームステイ留学異文化体験記」は「民族文化」(60.0%)が最も高い。異文化思考の深まりを比較すると、全体の値は「ワーキングホリデー異文化体験記」[28.9]、「ホームステイ留学体験記」[103.4]であり、「ホームステイ留学異文化体験記」が約 3.6 倍である。両単元は「民族文化」と「行動文化」の思考項目で差が顕著にみられる。記述、説明、判断の思考のプロセスの表出値は、「ワーキングホリデー異文化体験記」、「ホームステイ留学異文化体験記」の順に、記述 (15.8→65.5)、説明 (7.9→10.3)、判断 (5.3→27.6) であり、「ホームステイ留学異文化体験記」の方が思考が深まっている。これは、留学受け入れ先の学校という場面設定は、学習者に身近であり、日本の学校制度と比較し、違いについて思考がなされやすいためであると考えられる。しかし、トラブルの値は「ワーキングホリデー異文化体験記」の方が高く、特に「伝達」の項目に特化している。「ワーキングホリデー異文化体験記」で学習者が「行動文化」の認識やトラブルをイメージできているのは、職場で働けば、店員やお客さんという現地で交流する人を特定しやすく、サービスを提供する際のコミュニケーションを仮想しやすかったためであると考えられる。

体験先場面における異文化理解の深まりを比較する。異文化認識の全体の値は、「ワーキングホリデー異文化体験記」[107.9]、「ホームステイ留学異文化体験記」[124.1]であり、「ホームステイ留学異文化体験記」が約 1.2 倍となっている。「ワーキングホリデー異文化体験記」は、“人間の活動の成果”に関わる値が高く、特に「物質文化」に属する「住居」の項目に特化している。「ホームステイ留学異文化体験記」は、“文化を継承した人間”に関わる値が高く、特に「行動文化」に属する「習慣」の項目に特化している。文化の構成要素の表出割合は、「ワーキングホリデー異文化体験記」は「物質文化」(39.0%)、「ホームステイ留学異文化体験記」は「行動文化」(38.9%)が最も高い。異文化思考の深まりを比較すると、全体の値は「ワーキングホリデー異文化体験記」[39.5]、「ホームステイ留学体験記」[65.5]であり、「ホームステイ留学異文化体験記」が約 1.7 倍である。両単元は「行動文化」の思考項目で差が顕著にみられる。記述、説明、判断の思考のプロセスの表出値は、「ワーキングホリデー異文化

体験記」、「ホームスティ留学異文化体験記」の順に、記述（26.3→31.0）、説明（10.5→17.2）、判断（2.6→17.2）であり、「ホームスティ留学異文化体験記」の方が思考が深まっている。両単元ともトラブルはほとんど生じていない。「ホームスティ留学異文化体験記」は体験先をホームスティの地域に限定したため、地域社会という特定地域での異文化体験を仮想しやすかったと考えられる。また、地域の人々を介した交流を仮想しにくかったためトラブルが少なかったと考えられる。

場面ごとにとみると、宿泊先、外出先、体験先の順に異文化理解が深まっている。宿泊先ではホストファミリーという家族、外出先ではクラスメートや店員・客、体験先では地域に住む人など現地の人々が特定しやすい場面で異文化交流体験を仮想した場合に異文化理解が深まった。永田（2002）は、「ワーキングホリデー異文化体験記」は、宿泊先、外出先の職業選択、体験先を自由設定<sup>8)</sup>にしたために、現地の人々との交流を仮想しにくく、特に体験先で生徒の旅行意識が強かったことを示している。生活者の視点となる滞在型の異文化交流の仮想体験において、現地の人々との交流がイメージしやすい場面を設定し、学習者に場面に対応した項目を設定させる必要がある。

第9表は、短期留学の対象国としてイギリスを選択し、人々との異文化交流体験を仮想することによって異文化理解を深めている生徒の異文化体験記の事例である。

第9表 ホームスティ留学異文化体験記（イギリス）—R, U（男）の場合—

題【いい天気ですね】
<p>[バースで bath] (場面 1…宿泊先：ホームスティ)</p> <p>ロンドンから鉄道で約1時間。バースの Spa 駅に着いた。僕はまず、ホームスティ先まで歩いていった。バースの市街地は徒歩で回れるくらいの大きさで、ホームスティ先にもすぐ着いた。</p> <p>ホームスティ先に着くと、ホストマザー、ホストファーザー、そして、2人のホストブラザーが僕を歓迎してくれた。着いた時には、もう日が暮れていたもので、すでに夕食の用意がしてあった。㊦テーブルには当然ティーが置いてあった。イギリスに来たからにはティーは必ず飲みたいと思っていた。ティーがないイギリスなんて…</p> <p>夕食後は、お風呂に入らせてもらった。㊧お風呂は、体を洗うスペースがなく、シャワーもなく、しかも湯ぶねの中は泡だらけで、いわゆる泡風呂だった。㊨僕はホストファーザーに“どうやって、体や髪を洗うの？”と聞いた。するとホストファーザーは“湯ぶねの中で全部洗うんだよ。”と言った。僕は“えっ”と言った。㊩シャワーはないから髪を洗うのも湯ぶねに頭をつっこまないといけないし、その洗った湯を家族全員で共有して使っているから、“ちょっと汚いなー”と思った。風呂からあがると、㊪ホストファーザーとホストマザーが2人またティーを飲んでいて。寝る前にもティーを飲むらしい。僕はこの生活になれるか心配だ。でもまだ知らないイギリスの生活を、明日体験するかもしれないと思うとワクワクしてなかなか寝つけなかった。</p> <p>「[Living room] or [Sitting room] or [Launge] ?」(場面 2…外出先：地域の学校)</p> <p>次の朝、僕は2人のホストブラザーと学校に行った。兄の方は、僕の3コ下で、弟はそのまた3コ下だった。㊫日本では中学3年生と小学6年生だが、イギリスでは色々あって、公立と私立とかでも違って来る。そもそも、イギリスでは「卒業」という制度がない。㊬それを聞いて、「卒業」というのがないのはどうなのかな。そうなると、あの感動する卒業式もないのかな？</p> <p>僕の行く学校は公立だった。そして実際に英語の授業をした。しかし、㊭僕が英語をしゃべると、“君はアメリカン英語を話すね”と言われた。イギリスの本場の英語は、㊮日本のTVなどで聞くとカチコチしたアクセントで、アメリカの英語よりもハキハキした感じ。でも先生に聞いてみると、地方や地域で違っている。㊯階級の違いによっても使用する単語が変わってくる。居間という意味でも、上流階級は「Living room」、中流階級は「Sitting room」、下流階級は「Launge」と、全く違う。㊰階級で見方も変わってくるのかな？</p> <p>[日本人は干渉しすぎ!?] (場面 3…体験先：地域の異文化体験)</p> <p>今日は休みにホストファミリーとバースを観光した。バースの市街地を歩いていると、㊱車椅子で普通に散歩しているおばあちゃんを見た。おばあちゃんは、周囲の人の目を気にしていない様子で、また周囲の人も車椅子を気にしている様子もなかった。㊲日本では、街中を車椅子で散歩するだけでも、周囲の人の目が気になるかもしれない。でも、イギリスではそんなことはなかった。㊳僕は、そのイギリス人の性格や気質とかいうのを少しいいな。と思った。誰も他人のプライバシーに干渉しない。㊴日本人は干渉しすぎなのか？ そういえば、㊵イギリスの人は、人と話す時、まず天気のことを聞く。㊶それは、階級社会であるイギリスで、人々が階級に関係なく話せることに「天気」があるからみたいだ。それに、イギリ</p>

スは天気が変わりやすいから、天気を気にしすぎるのかなあ？

僕たちはストーンヘンジにも行った。何でこんなのを昔つくったのかと神秘的な気持ちになって、同時に今までのイギリスでの生活の中で感じた新鮮な体験を思い出した。㊦イギリスの生活や色々な違いというのは、もとをたどれば「階級」だった。㊧「階級」があるから、色々と違いがあって、他人にも干渉しないし、他人に自分の考えを押しつけない。そんなイギリスが僕は好きになった。

参考文献：イギリス一街・ひと・暮らしの体感ワールド、<http://www.uknow.or.jp/be/ukview>

注) 第1表の認識項目を○とアンダーライン、第2表の思考項目を□斜字太字、トラブルを◇斜字太字で表している。

## V. 成果と課題

本研究では、異文化理解が深まるとは、認識面でも思考面でも深まることであることを示し、異文化認識の深まりとして、“人間活動の成果”ばかりでなく“文化を継承した人間”をとらえていくこと、異文化思考の深まりとして、記述→説明→判断という思考のプロセスを踏むことを示した。また、高等学校地理における異文化理解をテーマとした地域調査学習として、現地調査過程において異文化交流の仮想体験を活用した文献調査を行うことを提案し、実験授業を行い、異文化の深まりを比較分析することでその有効性を示した。

異文化交流の仮想体験を活用した単元の実験授業の比較分析から、異文化理解を深める高等学校地理における地域調査学習の開発視点として以下の3点をあげることができる。

1つは、事前調査の過程として、文化事象の情報を獲得する入力型学習をもとに、現地調査過程として異文化交流の仮想体験を活用した出力型学習を設定する。

2つは、学習者が生活者の視点に立つことができる滞在型の現地調査過程を設定し、現地の人々との異文化交流の仮想体験をイメージさせる。

3つは、異文化交流の仮想体験を想定する異文化体験記づくりで、現地の人々との交流を特定しやすい場面を設定し、それぞれに対応する項目を記述させる。

本研究で最も異文化理解が深まることを示した単元「ホームステイ留学異文化体験記」は、実験授業の結果の比較分析、生徒の評価、学会での批判などを材料として、試案の修正を繰り返してきたものである。しかし、まだ異文化理解の深まりが不十分である。本研究で示した異文化理解を深める地域調査学習の開発視点をもとに、より異文化理解を深める高等学校における地域調査学習を開発していきたい。

本研究の一部は平成14年度科学研究費補助金(14910005)の助成を得た成果である。

### 【註】

- 1) 文化摩擦は人々の行動様式や価値観の違いに起因する不和や葛藤をさす。本研究では個人レベルの文化摩擦に着目し、カルチャーショックや人々とのトラブルを重視する。
- 2) 対象地域の人々の集団への帰属意識であるエスニシティに関わる言語・宗教・行事・芸術・規則等の文化事象を対象とする。
- 3) 筆者が所属していた広島県立三原東高等学校では、2000年度から国際交流を目的として修学旅行でシンガポールに行くことになった。2001年度はアメリカ合衆国の同時多発テロにより国内旅行に変更となり、計画していた実体験の現地調査学習ができず、資料による調査学習のみとなった。
- 4) ワーキングホリデー制度は働きながら自分だけのスタイルの旅ができ、一般旅行と違った独自の異文化交流体験が可能であり、青少年が相手国の文化と一般的な生活様式を理解することを目的としている。2008年時点で日本とのワーキングホリデー制度提携国は、提携順にオーストラリア・ニュージーランド・カナダ・韓国・フ

ランス・ドイツ・アイルランド・デンマークの8か国である。

- 5) 2~3週間程度でホームステイをしながら現地の学校に通う制度で、語学の勉学の習得を主目的とするのではなく現地の家庭に触れながら相手国の文化と一般的な生活様式を理解することを目的としている。取り上げた対象国は英語圏のイギリス・カナダ・オーストラリア・ニュージーランドの4か国である。
- 6) 各アプローチの人数が異なるので、実数ではなく発現率として示した値（各ポイント数を人数で割って100を掛けた）で考察する。
- 7) 人々の行動様式や価値観の違いから生じる個人レベルの文化摩擦を記述したもの。
- 8) 38名分の宿泊先の内訳は、ホームステイが31人、ホテルが4人、アパート・ドミトリー等の共同宿泊施設が3人、外出先の職場の内訳は、レストランなどの飲食店が16人、免税店などの小売店が8人、牧場などの地域の産業が7人、ベビーシッターなどのその他のサービス業が7人、体験先の内訳は、観光が31人、買い物が3人、ガーデニング・牧場などの地域独自の体験が4人であった。

### 【文献】

- 石井敏（1998）：文化とコミュニケーションのかかわり。鍋倉健悦編：『異文化間コミュニケーションへの招待—異文化の理解から異文化の交流に向けて—』北樹出版，pp.41-65.
- 小西正雄（1994）：『「提案する社会科」の授業観』小西正雄編，『「提案する社会科」の授業1』明治図書，pp.19-28
- 小原友行（1996）：広島プロジェクトの3ヶ年の研究から学ぶもの—異文化理解教育のカリキュラム開発の視点と方法—。広島大学国際理解研究会：『アメリカ合衆国の社会と文化の理解のためのカリキュラム開発研究』第3集，pp.VII-12.
- シタラム K.S.著，御堂岡潔訳（1985）：『異文化間コミュニケーション—欧米中心主義からの脱却—』東京創元社。  
Sitaram, K.S. (1976): *Foundations of intercultural communication*. C.E.Merrill, Columbus, Ohio.
- 佐野正之（1995）：異文化理解の基礎。佐野正之・水落一朗・鈴木龍一『異文化理解のストラテジー』大修館書店
- 永田成文（2000）：中学校社会科文化史学習の新構想—文化の転換期に視点をおいて—。社会系教科教育学研究，12号，2000，pp.73-80
- 永田成文（2001）：地理的認識を育成する高等学校「地域調査」学習の改善—修学旅行を活用して—。地理教育フォーラム，第2号，pp.55-64
- 永田成文（2002）：異文化理解を深める高等学校地域調査学習の改善—擬似的な異文化交流体験を活用して—。地理教育フォーラム，第3号，pp.67-76
- 西脇保幸（1993）：『地理教育論序説—地球的市民の育成を目指して—』二宮書店
- 文部省（1999）：『高等学校学習指導要領解説地理歴史編』実教出版
- 矢島舜孳（1998）：地理的な見方・考え方。高橋伸夫ほか『高校生の地理A教授資料』二宮書店，pp.12-13.
- 米山俊直（1991）：文化人類学を学ぶということ。米山俊直・谷泰編：『文化人類学を学ぶ人のために』世界思想社，pp.3-13.